

『福祉施設における木工への取組』

社会福祉法人厚生協会 わかふじ寮 わかふじワークセンター センター長 鈴木 睦

URL <http://www.wakafuji.or.jp/>



北海道のほぼ真ん中にある新得町。豊かな森林資源により林業が発達した町である。

わかふじ寮は、昭和28年、木工訓練を通して聴覚障害者の社会的自立を促すために身体障害者授産所わかふじ寮を設立したのが始まりで、この授産所は戦後の混乱期にろうあ学校の卒業後の働く場所が無く、卒業生に何か技術を習得させ、社会に送り出すことを目的として、藤川マキエ先生と田中皎一先生が篤志家の援助を受けて設立された施設である。

木工訓練を選択したのは、聴覚障害者が比較的手先が器用な人が多かったことと新得町が森林資源に恵まれ、営林署や家具工場など関連企業も多く、技術指導などの点で協力者が見込まれたためである。当初は訓練棟もなく、家具工場へ日中手伝いに行き、夜に工場を借りての技術訓練に励み、昭和30年に法人認可を経て補助金等で施設の整備を行い授産施設わかふじ寮が誕生した。



(施設の全景)

訓練に際しては、初級・中級・上級とグループがあり施設内での技能大会等を行い、技術を磨き5年を目途に就職させることから始まり、今までおよそ150名の方を一般就労に結びつけることができた。

現在、わかふじ寮(就労継続支援B型・施設入所支援)・第2わかふじ寮(生活介護支援・施設入所支援)・

わかふじワークセンター(就労継続支援B型)と3施設に分かれ、利用者120名程が家具建具及び木製品・ウエス・ペットフード・パン・看板の製造販売や法人内のゴミ回収の委託事業等に取り組んでいる。

家具建具・木製品の製作には、同じ聴覚障害を持った職員が支援することで、個々の特性に合わせた作業支援を行っている。



(作業中の様子)

木工作業の変遷

当初、就職を目指す観点から基礎技術・機械作業・組立作業と一人で初めから最後まで工程を習得の訓練として製作を行い、土・日で各市町村を巡り展示販売会の売上により、材料の購入や工賃の支給も行っていった。

わかふじ寮の家具は、町内でも頑丈なつくりだと定評があり、特に押入用タンス等が売れ筋となっていた。

昭和60年にカラマツ集成材工場も稼働させ、テー

ブル天板用としての活用も行ったが、現在はカバ材の集成材を製作し、新得町発祥の軽スポーツであるフロアカーリングの製造販売を行っている。

昭和61年頃より、帯広市内のホテルで木工が趣味であるオーナーから新築するホテルのルーム家具の依頼があり、50室のヘッドボード・ナイトテーブル・デスク・ミラーやレストランのテーブルを製作し、無事納品されたことから別のホテルの紹介を戴いたが、納品期日までのスケジュール設定が甘く、又前回より3倍の数量・特殊な形状などにより、作業は試行錯誤の連続であった。2週間程深夜までの作業が続き、試泊前日は寝ずの作業となり試泊日の12時までには清掃を含め終わらせて納品ができた。



(製作家具の一例)

その後、西洋環境開発株式会社が新得町にホテルサホロを建設した際には新得町長と助役の強い推薦もあり、ホテル家具を受注でき、西武系列の西和インテリアから技術者を派遣してもらい、当時営林署から購入していた手持ちのタモ材・ニレ材を活用したほとんど無垢材を使用した家具の製作であり、前回の苦い経験から残業もありましたが、期日前には無事納品が完了し、オープン前には利用者全員をディナーに御招待を戴いた。自分たちが製作した家具を見て、苦勞した結果が実を結び、笑顔で食事す

る利用者がそこにいた。



(製作家具の一例)

2年後の2期工事も受注し、建築を担当していた大成建設と繋がりが広がり、隣町の清水赤十字病院の造作家具も丸井今井の建装部を介して受注ができた。

その頃より、今まで定番商品の製作が多く在庫を抱えての販売に限界を感じていた時であり、又利用者の工賃も増額できなかったことが、ホテルの家具を手掛けたことから徐々にオーダー家具が主となり、利用者と職員が一丸となって作業に取り組み、利用者の工賃も徐々に増額することができた。

オーダー家具は、個人のお客様や建設会社・福祉施設等の備品が多く、使用される方の意向に沿ったものやこれまでの経験からお客様に合った提案を行うことで納得いただける家具を製作している。主に北海道内

での受注ではあるが、道外の施設等からの受注も行っている。

20年程前より、利用者の高齢化や新規利用者の重複障害など家具製作に携われない方々には、木製品(小物商品)の製作や下請製品の製作に取り組んでいる。

下請小物製品は、16年程前に様似町のウッディランド南物産より国内向け小口数量の下請加工を受注し、その後、直接取引先とのパイプを引き継ぎ現在に至る。又、男性指導員が小物商品を担当していたが利用者に作業を提供することが主となり、小物商品の顧客ニーズには沿ったものではなかった。

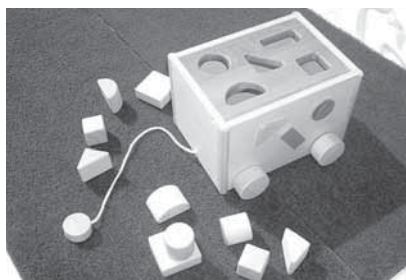
担当職員の後継者として指導員を探していたところ、以前から知り合いの高等技術専門学校の科員より、転職先を探していた卒業生である女性の紹介を戴き、平成19年より職員として採用する。今まで男性目線での商品作りであり、玩具の要素が高い商品であることから女性目線の感受性、繊細さが求められる商品作りに変遷し現在に至る(写真を参照してください)。

主に小物商品は、新千歳空港内で2か所・野口観光で乃の風リゾート(洞爺)とホロホロ山荘と名水亭(伊達市大滝)、十勝管内4か所で委託販売されている。

下請製品は、ポーネルドのかな積み木や様似町のテニポン用ラケット、ニチガンのオルゴールカー等を製作している。



(小物製品の一例)



今後の施設としての取組

現状、中々就職に結びつけることが難しいことから、就労継続B型支援に力をいれて、地域移行を増やすことを目標としている。

木製品については、わかふじ寮でのNCルーター・ワイドベルトサンダー等と他施設や企業が保有するレーザー彫り機・ダイレクトプリンター等との相互利用による受注の確保を目指す。

わかふじ寮の原点である家具製作は職員・利用者の高齢化もあり、将来への不安材料となっていることを踏まえ、事業全体の検討が必要となっている。

又、利用者全体のニーズに合わせた作業の新規事業を模索している。